審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

第二言語・外国語としての英語学習，とりわけ文法習得と語彙習得については国内外で膨大な数の研究がなされてきているが，品詞理解，特に単語の持つ統語的機能の習得についてはほとんど研究が行われてこなかった。小西氏は，自身のそれまでの語彙習得研究の中で，学習者が語彙を学んでいく過程で単語の統語機能の理解が不十分であるとの結果を得て，単語の統語機能の不理解が，文法習得ひいては英語習得の様々な困難に結びついているのではないかと推察し，その調査を遂行したところに独創性が認められる。

また，包括的な英語品詞理解度テストがこれまで存在しなかったことから，そのプロトタイプを開発し，さらに 4 回のリサーチによってその精度を高めて品詞理解度テストを完成させたことは，今後の英語教育の研究と実践に大きく寄与するものである。

さらに，本研究から，これまで習得が容易であると思われていた名詞の統語素性・機能の理解が不十分であり，そのことが，後置修飾語句を伴う名詞句・名詞節などの，より大きな単位の習得の困難をもたらしている可能性が示唆されたことは，これまでの研究になかった成果として高い意義を有している。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究では，品詞理解度テストの開発と，品詞理解度の調査を並行して行うアプローチを採用した。小西氏の博士論文は，Study 1 から Study 4 までの集大成であり，品詞理解度の調査という観点からは，4 回にわたる調査でテストを改良しながら，より精度の高い結果を得ることができたと言え，また，テスト開発の観点からは，より妥当性の高いテストが作成できたと言える。Study 1 では，3 つのパートからなる英語品詞理解度テストと，2 つのパートからなる日本語品詞理解度テストを開発し，大学生を対象に調査を行った。英語品詞理解度テストは，1）提示文の単語と同じ品詞を選択肢から選ばせる CJT（Category Judgment Test），2）品詞の間違った使い方を見つけて正しい用法に直させる CT（Correction Test），3）副詞と形容詞が文中でどの語を修飾しているのかを判断させる MT（Modifier Test）の 3 つである。一方，日本語品詞テストは，母語において品詞をメタ言語的に理解する力を測るためのテストであり，CJT と MT の 2 種である。Study 1 の分析結果をもとに，テストを改良して高校生を対象に実施したのが Study 2 である。Study 2 では，CT を廃止し，新たに空所補充形式の Blank Filling Test（BFT）と，形態的 に同じでありながら統語素性の異なる使い方をされている単語の品詞理解を見るための Same Form Test（SFT）を設けた。資料に更なる改良を加えて Study 3 を大学生を対象に実施したのち，本研究で最も大規模な調査として，Study 4 を 1012 人の高校生を対象に行った。

こうした手続きによる研究方法は，英語教育分野の研究において妥当なものである。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

第一に，品詞理解度を測るテストの開発においては，先行研究における統語テストの形式を踏まえて，適切な方法を選択するとともに，4 回にわたる調査の過程で常に改善を重ねていき，適

切な資料作成が行われていた。特に，複数のタスクを用いることで，学習者の品詞理解の諸相を多面的に理解することを可能にするとともに，テストの実施可能性の観点から出題形式と出題項目の取捨選択を行って，教育現場での使用に適した規模のテストを開発することができた。第二に，使用される語彙の選定ならびにそれらが提示される文脈の設定において，緻密な検討がなされた点が評価できる。第三に，結果の分析において，量的分析として，記述統計および推理統計が適切に用いられているとともに，質的分析として，誤りの分析が的確になされていた。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

研究の考察においては，学習者の英語の品詞理解状況，日本語の品詞理解状況，両者の関係について，適切な統計処理を用いた分析がなされ，適切な考察と妥当な結論が導かれている。また，品詞の種別，個々の語の統語素性と意味的特徴，文脈情報をもとにした分析が適切になされている。そこからの結論の導き方は妥当であり，かつ，教育への示唆に富むものである。この研究の過程で開発された品詞理解度テストの質も高く，今後英語教育の実践と研究の場で利用されていくに足る水準にあると言える。これらのことから本研究の学術的な水準は十分に高いものである。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

第一に，本研究が，日本の高校生および大学生の英語品詞の理解状況を明らかにした意義は大きい。とりわけ，容易とされていた名詞の統語的理解が困難であることが明らかにしたことは，より大きな文要素である名詞句や名詞節の習得が困難であることの理論的解明に資するとともに，その困難を克服する指導法や教材の開発につながるものである。さらに，統語的な機能を理解せずに意味情報だけを頼りに品詞の認識をしている学習者が多いことを明らかにした点，また，名詞に先行する冠詞や所有代名詞などの標識は、学習者に名詞認識を容易にするものと考えられてきたが，理解の阻害要因にすらなりうることを示した点も，注目に値する。これらの研究成果は，今後の英語教育，とりわけ語彙指導と文法指導に大きな示唆を与えるものであると言える。

第二に，小西氏が開発した品詞理解度テスト自体が大きな価値を有している。今後，英語教育の場において，このテストを用いて，学習者の品詞理解度を測定することで，学習者の能力を知り，困難点を診断し，その後の指導に生かすことが期待される。

以上のことから，審査委員会は，全員一致で本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与論文としてふさわしいと判断した。